

Expressed Wish (表出された希望・内なる望み)

意思決定支援 (Supported Decision Making)

実践システムの基盤構築事業

活動報告書

平成 29 年 4 月 1 日～平成 30 年 3 月 31 日



意思決定支援モデル開発プロジェクトチーム

(SDM-Japan)

Supported by
 **日本財団**
THE NIPPON
FOUNDATION

目次

事業 1 : 日本における実践・育成システムの構築と検討	1
事業 2 : トレーナーとファシリテーターの育成	4
事業 3 : expressed wish (表出された意思・心からの希望) 普及 ・啓発のための検討会・ワークショップの実施	6
3-1 龍谷大学 福祉フォーラム (9 月 9 日)	10
3-2 SDM ワークショップ in 大阪 (9 月 10 日)	12
3-3 SDM ワークショップ 家族のための会話(9 月 13 日) . .	15
3-4 SDM ワークショップ 専門職向け集中スキル (9 月 16 日~20 日)	17
3-5 SDM ワークショップ メンタリング・コーチング (9 月 22 日)	22
3-6 SDM ワークショップ アンケート結果 (2017 年 9 月) . .	24
3-7 SDM ワークショップ アンケート結果概要	
事業 4 : 意思決定支援実践シンポジウム	
(別冊資料)	
その他 : Yahoo!Japan 特集 関連する論文	

事業 1 : 日本における

実践・育成システムの構築と検討

1 実践・育成システムの構築

(1) 活動概要

座学と演習等により基本的な理念とスキルを学んだ者が「ファシリテーター研修生」となり、その後、実際に意思決定者（decision-maker）をリクルートしてチームを形成し、実践的な研修を行いつつ指導を受けるのが SA-SDM における基本的な研修の流れである。そのため、本事業において 2017 年 9 月に実施した一連のワークショップ（事業 3 参照）を受講し修了した**名から、希望者のうち 4 名が実践研修に進むこととなった。希望者はこれよりも多くいたが、実践フィールドの確保や取り組みに費やす時間の捻出、勤務との兼ね合いなど諸条件が考慮され絞られたものである。それぞれ、北海道（空知）、千葉（千葉）、東京（町田）、神奈川（藤沢）で実践の取り組みを始めた。また同じくワークショップの修了者から、コーチング・メンタリングを行う者（コーチ・メンター）と、記録やデータの取りまとめを行う者（記録者）が配置された。従って、各チームは 3～4 の構成により開始された。チームは北海道（空知）、千葉（千葉）、東京（町田）、神奈川（藤沢）であった。各チームは基本的な活動体制を整えると、SA-SDM モデルにおける第 1 段階である、リクルート活動に進んだ。各チームは隔週～月 1 回の頻度でミーティングの機会を設けた。オーストラリアでは週 1 回のミーティング開催が求められていたが、意思決定者（decision-maker）の候補ならびに各メンバーの事情により、毎週の実施は困難だった。また千葉のチームは実施環境に課題があったためいったん解散し、メンバーは他のチームに再配置された。

3 チームはそれぞれのペースで意思決定者（decision-maker）の候補とのミーティングを重ね、2017 年 2 月末の段階で、いずれもほぼリクルート段階から第 2 段階の合意書作成まで進んでいる。これより順次合意書の形成と署名が取り交わされた後に第 3 段階のミーティングに進むこととなる。このような実践研修はほぼ半年の期間とされているが、本研修では 4 月までを目処として取り組みを進めることとなっている。

（SA-SDM モデルにおける基本的なチーム構成やミーティングの各段階については、****を参照されたい。）

各チームともメンバーは地理的に一堂に会することが困難だった。例えば北海道のチームは、北海道、熊本、新潟のメンバーで組まれていた。また比較的近い東京（町田）のチームも、町田、**、千葉と分散していたため、ファシリテーター研修生と意思決定者（decision-maker）の候補が実際に会ってミーティングを開催する際に現地に行ける者は同席し、行けなかった者は skype 等のネットによる会話ツールを用いて参加する形式を取った。このようなミーティングに対し¹、人トレーナー候補は適宜各チームのミーティングに参加し、助言・指導を行った。これもやはり可能な範囲で同席もしくはネット会議参加であった。

各回のミーティングは、基本的に以下のような流れで進む。(a)前日の準備ミーティング、(b)当日のブリーフィングから引き続き(c)ミーティング実施、そして直後に(d)デブリーフィングまでを当日に行い、後日(e)まとめと

次回の準備、(f)トレーナーによるスーパービジョンを受ける。(a)ではネット会議を使用し、ミーティングの目的・課題、留意点を確認し、全体の流れと役割を整理する。また主として用いるスキルを取り上げ検討することで、目的的な会話を効率的かつ効果的に行えるようにするとともに、研修効果を高める。(b)では前日の準備を確認するとともに、当日の状況に合わせた調整を行う。(d)ではミーティング全体を振り返るとともに、ウィッシュ（wish）の取扱いについて、ファシリテーター研修生の良かった点、課題となった点や用いられたスキルの確認などを行う。そしてこれらの取り組みに従って(e)で記録を整理し、次回のミーティングの準備につなげる。(e)では必要に応じてメールによる議論とネット会議形式を用いる。また標準的な記録様式に従って記録する。(f)では記録が英訳されてメールによりオーストラリアのトレーナーに提出され、丁寧なスーパービジョンを受ける。日本人トレーナー候補は各チームのミーティングへの参加も含めて適宜これらの手順に関わり、必要な指導を行った。以上のミーティング手順はチームによって異なりはあるものの、トレーナーが介在してほぼ共通した方針と方法で進められている。

各メンバーのうちファシリテーター候補者とトレーナーはモデルの標準的な役割が定められているが、他の役割は日本で新規に試みられているものである。コーチ・メンターはコーチング・メンタリングを行うものとして位置づけられていた。ファシリテーター候補者の実践を外側から観察し、必要な指摘を行い、客観的に振り返られるよう助言した。またファシリテーター候補者の気づきを促した。加えて、用いられたスキルの検討についても意識化する役割を担った。しかし今回は初回の実践だったこともあり、同時に学習者としても参加していると考えられる。記録者はミーティング全体を整理記録するとともに、データの監修を担う。また適宜メンター・コーチを補助するような発言も行っている。このような役割分担により、ファシリテーター候補者が SA-SDM モデルを基本とした研修を重ねるとともに、それぞれが学習を行うことが可能となっている。

（２） 基本的な実践・育成システムの構築とこれに基づく実践の展開

このような取り組みの結果、目標とした日本における SA-SDM 実践・育成システム構築としては、初年度としての成果は挙げられたと考える。まだ実践研修が完了していないが、ここまでで試行錯誤により構築されたスタイルを要約すると以下になる。

- ・ワークショップ研修（座学・演習）による理念と基本スキルの学習
- ・OJT としてのミーティングによる実践活動とスーパービジョン
- ・ファシリテーター候補者とトレーナー（候補者）に加え、コーチ・メンターや記録者の参加による輻輳的な学習機会
- ・skype 等のネット会議ツールならびにメールを用いたミーティング実施

これは日本の現状を考慮した際に実施可能な方法を模索した末の手順枠組みであり、今後もこの枠組を検討しながらさらに運用しやすく効果の高い実践と研修の方法を開発していく必要がある。またこの枠組はオーストラリアのトレーナーであるシェア・ニコルソン氏に多くを依拠しているため、今後さらに日本のトレーナーを中心としたシステムに移行するに従って調整を行う必要がある。時間的な都合から本年度事業としては最終的な提案までには至っていないが、一定の結論を見出すことができたと思う。

2 事業運営におけるネット会議システムの活用

実践研修においては、ネット会議ツールの導入が不可欠であった。またこの事業を運営するための会議についてもやはりネット会議システムが常時用いられた。運営のための会議は平均して月 1 回のペースで、日本の各地を結んで実施された。中心となる会場は主として東京都内の会議室などだった。システムを構成する機器として、ネット会議用のいわゆるスピーカーフォン（マイクとスピーカーにより会議の発言を集約し、また発声する）をパソコンに繋いで用いた。またネット上の会話ツールとしては、skype が主として用いられた。これらの実践を通じて、ネットによるミーティング・会議の実施は不可欠であると結論されたが、しかし課題も見出された。ここでは 3 つの要素に分けて述べる。

(a)スピーカーフォンなどの機器は、数名程度の小規模な会議であれば廉価であっても効果を得ることができるが、しかしより安定的に会議を行うには、一定程度以上の性能が必要である。さらに各チームのミーティングではタブレットやスマートフォンを用いて実施するところもあり、ミーティングには不十分だった。そのため後期にはスピーカーフォンの導入を行って対処したが、さらに検討してより効果的な機器を導入する必要がある。

(b)当然ながらインターネット環境と skype を代表とするアプリによって効用が大きく変化する。日本でのモデル実践においては極めて重要な要素でもある。残念ながら一部のチームではネット環境が大変不安定で、ミーティングが十分に行えないこともあった。そのため、今後は各チームにモバイルルータの導入などを含めた環境整備が不可欠である。さらに skype は導入が用意だが必ずしも安定性に優れていないため、これ以外のツールの検討も望ましい。

(c)会議・ミーティングでは議事録の作成や参加者が同時に資料参照することができる環境を用意することが重要であり、実際これがうまくできず非効率な話し合いになることもあった。残念ながら skype に備わる機能だけでは不十分であった。そのため、今後は別の会議システムについても検討する必要がある。

事業 3 :expressed wish（表出された意思・心からの希望）普及・啓発のための検討会・ワークショップの実施

1 実施日時及び場所

(1) 専門職向け SDM ワークショップ in 大阪

日時：2017 年 9 月 10 日,11 日 午前 9 時～午後 5 時 場所：龍谷大学梅田キャンパス

(2) 家族向け SDM ワークショップ

日時：2017 年 9 月 13 日 午前 10 時～午後 3 時 場所：東洋大学白山校舎

(3) 専門職向け SDM ワークショップ in 東京

日時：2017 年 9 月 16 日～20 日 午前 10 時～午後 5 時 場所：筑波大学東京キャンパス

(4) メンタリング・コーチングワークショップ

日時：2017 年 9 月 22 日 午前 9 時～午後 5 時 場所：筑波大学東京キャンパス

※それぞれのワークショップの状況については、各報告書を参照されたい。

※ワークショップ参加者のアンケートについては、SDM ワークショップ 2017 アンケート結果概要を参照。

2 総括報告

(1) はじめに

現地トレーナーのシェア氏・デビー氏の来日に合わせて、複数回にわたってワークショップ（検討会）を実施した。ワークショップごとに対象者は異なるが、以下の点については共通点がみられた。

(2) 「最善の利益 best interest」と「表出された意思・心からの希望 expressed wish」の区別

ワークショップでは、ご本人による意思決定を支える支援（意思決定支援）の活動指針としては、expressed wish（表出された意思、心からの希望）によるべきであり、best interest（最善の利益）によるべきではない、という点について一貫した説明がなされていた。この点、日本では、厚生労働省が平成 29 年 3 月に発出した障害福祉サービス等の提供に係る意思決定支援ガイドラインでも混乱が見られるように、本来、第三者による代理代行決定の場面で用いられる「最善の利益」の概念が、意思決定支援における基本指針の一部かのように表現されている。支援者もまた、本人の客観的な利益を図るためには様々な制約を課すこともやむを得ないという発想に疑問を感じていないことが多い。このような状況だからこそ、あえて expressed wish（表出された意思、心からの希望）を best interest（最善の利益）の対置概念として位置づけ、その違いを知ることは支援者にとっても有益であるものと考えられる。参加者のアンケート結果からも、支援者の立場、親の立場として、「どうしても本人に善かれとの思いが強くなりがちで Best Interest に偏っていた。」「自分の意見を押しつけていたことに気づかされ、反省した。」という意見

も多く、意思決定支援の手法を学ぶ前に、前提となる支援者としての立ち位置、支援の指針について理解することの重要性を示している。

（３）本人意思の読み取りのための基本スキル ―目的のある会話―

意思決定支援における基本概念としての expressed wish についての理解を深めた上で、意思決定者の expressed wish や will and preferences（意思及び選好）を引き出すためには、「目的のある会話」を行う必要性があり、それは４つの基本的スキルによって構成されたとの説明を受けた。

- １） 意見なし・助言なし
- ２） 現在とこれからのことについて話す
- ３） 話の内容に巻き込まれない
- ４） 相手のできることや夢を広げるチャンスを探す

さらに、専門職向けワークショップ in 東京では、「目的ある会話」をさらに効果的に進めるためには、以下の１０のスキルを活用する必要があるとの説明がなされた。

- １） エコー（オウム返し）
- ２） 感情の反射
- ３） 話の内容
- ４） 開かれた質問と閉ざされた質問
- ５） 言い換え
- ６） 沈黙
- ７） 穏やかな対立
- ８） 意味探し
- ９） 要約
- １０） フォーカシング（焦点化）

様々な事例を基にトレーナー同士が模擬会話を行い、スキルを使った場合の成功例と使わない場合の失敗例を提示することにより、参加者がその違いを理解できるように工夫されていた。）

（４）ピアコンサルタント（障がい当事者）の関与とスキル活用のための実地研修

ピアコンサルタント（障害当事者）をお招きして、講義・演習で学んだ「目的のある会話」のスキルを活用した模擬ミーティングが行われた。まずは、トレーナーがピアコンサルタントに対してスキルを用いたインタビューを行い、あわせて参加者からインタビューに加わる者を募った。その際、インタビューに加わった参加者は①健康、②居住の場、③ライフスタイル、④金銭管理の中の１つのテーマを選択し、ピアコンサルタントにインタビューを行うこととされた。インタビュー終了後には、参加者同士でディスカッションを行い、ピアコンサルタントの健康、居住の場、ライフスタイル、金銭管理について、「目的のある会話」を通じて、どのような希望や願い、夢（hopes and dreams）が得られたかの確認がなされた。

このように講義や模擬演習で学んだスキルを学んだままにするのではなく、トレーナーの関与の下、障害当事者と直にやりとりを行うことによって、研修効果を高めていく工夫が感じられた。

（５）ワークショップに参加したことによる参加者の変化

アンケートによれば、ワークショップの内容は有意義だったかについて、参加者の約 2/3 が「そう思う」、残りが「概ねそう思う」と回答しており、概ね好評であったことが窺える。専門職からは「表出された意思（希望）の考え方の基本が理解できた」「実際にどのように行っていくのかを実践モデルの演習形式で示していただけたのが分かりやすかった」「当事者支援を通じて地域を巻き込む方法は大変興味深かった」、家族からは「まったく考えてもいない視点からのお話だった」「エクスプレスウィッシュを引き出すスキルを少し学べたことと、自分の意見を押しつけていたことに気がつくことができた」などの感想があり、ワークショップを通じて、意思決定支援の手法だけではなく expressed wish のコンセプトも含めて理解が促進された。他方で、特に東京のワークショップは 5 日間にわたるものであり、「5 日間平日だと厳しい」「長すぎる」との回答が複数あったことから、今後の課題としてワークショップのスリム化についても検討すべきであろう。

さらに、今後 SDM モデルを日本で実践しようと思うかについて、専門職は約半数が「そう思う」と答え、「今の障がい者支援方法においてとても有効だと思う」「徹底的な本人中心は、今、日本のどこにもないように感じているため。周囲を変容させるパワーを感じたから」などの記述があり、ワークショップを通じて、意思決定支援の実践に向けた意欲を高めることが出来たものと考えられる。一方で、「ただし、日本の制度、現場実践対応可能な形に若干アレンジが必要」「やってみたいと思うが、どういうところから、どの部分から取り入れるか整理して取り組みたい」「職務上 6 ヶ月のフルモデルを行うことは難しいが、業務の中においてスキルを活用しながら本人の意思の表出を促すお手伝いが出来るのではないか」という意見や、「成年後見の枠組みの中でフルモデルを実践するのは難しいと感じた」「そのままの形を実践するにはかなり壁が高いので、考え方を自分の実践に取り入れていきたい」等の感想もあり、南オーストラリア州の SDM モデルを日本においてフルバージョンで実践することは、その実践環境の確保も含め、かなりの困難を伴うのではないかとこの観点で示された。

ワークショップ実施後に行った SDM-Japan のメーリングリストへの登録希望については、専門職のほとんど、および家族の約半数が「希望する」と回答しており、SDM-Japan の進める日本型意思決定支援モデルづくりへの期待やワークショップ等への参加の意欲が窺えた。

3 - 1 龍谷大学 福祉フォーラム

障がいのある人への 意思決定支援 ～オーストラリアの実践から学ぶ～

1 実施日時および場所

日時 2017年9月9日（土） 午後 1時30分～ 4時30分

場所 龍谷大学瀬田学舎 6号館プレゼンテーション室 滋賀県大津市瀬田大江町横谷1-5

＜開催の趣旨＞ 龍谷大学・龍谷エクステンションセンターでは、「福祉フォーラム」と称したシンポジウム等の企画を、2006年より毎年開催している。この事業の理念は、「共生」と「協働」をキーワードに、「協議の場」「交流の場」「創造の場」「支援の場」をつくることである。今年度は、4月に厚生労働省が「意思決定ガイドライン」を公表するなど昨今注目されている「意思決定支援」をメインテーマとして開催された。今回、国際的にも評価されているオーストラリアにおける意思決定支援について学び、今後のわが国における意思決定支援のあり方について、議論を深める場としたい。

2 当日概要

(1) 基調講演と実践報告

基調講演として、SDM-Japan代表である弁護士の水島俊彦先生を講師にお招きし、「オーストラリアの意思決定支援から学ぶこと ～わが国の実践にどう生かすか～」をテーマに講演していただいた。法律の専門家としての立場から、イギリスやオーストラリア、日本の実践例をわかりやすく整理した上で、今後わが国が目指すべき意思決定支援のあり方について問題提起をしていただいた。次に、実践報告として、オーストラリアよりシェア・ニコルソン氏、デビー・ノーレス氏のお二人の実践家をお招きし、貴重な報告をしていただいた（演題は「S.A-SDM（支援付き意思決定モデル）～南オーストラリアにおける意思決定支援の実際」）。お二人からは南オーストラリア州のモデルの基本理念や、具体的な実践例について、映像を交えて非常にわかりやすく解説していただいた。

(2) パネルディスカッション

後半はパネルディスカッションを行った。パネリストには、上記の3名の方々に加え、滋賀県の権利擁護の実践家である桐高とよみ氏（NPO法人 甲賀・湖南成年後見センターぱんじー所長）、そしてSDM-Japanの副代表である小杉弘子氏のお2人を加えた5名で討論を行った。パネリストがクライエント役と支援者役に分かれてのロールプレイングなど、工夫をこらした討論形式も交えながら、具体的な支援の実際について学ぶことができ、実り多いシンポジウムとなった。

基調講演



パネルディスカッション



3-2 S D Mワークショップ in 大阪

1 実施日時及び場所

日時 2017 年 9 月 10 日（日）午前 9 時～午後 5 時 場所 龍谷大学梅田キャンパス

参加人数 19 名

2 ワークショップ 1 日目概要

ワークショップの始めに、支援付意思決定（意思決定支援）の出発点として、人のもつ権利と責任についてディスカッションを行った上で、障害者権利条約における意思決定支援の位置づけや意思決定支援モデルを実行する上での留意事項（安全性の担保、手続遵守、チーム構成等）を学んだ。特にチーム構成の点では、S.A-SDM のモデルを視覚化し、参加者が講師の指示により椅子を移動することにより、本人を中心としてどのように支援の輪が広がっていく様子をイメージすることが出来た。続いて S.A-SDM に関する 4 つの場面（リクルート、合意書形成、チームづくり、チームの持続可能性を前提とする終結）をそれぞれ検討したうえで、意思決定支援において重要な expressed wish（表出された意思、心からの希望）の概念と best interest（最善の利益）との違いについて学んだ。午後は、2 日目に向けて、4 つの重要なトピック（健康、居住場所、ライフスタイル、金銭管理）に対して、意思決定支援の場面で活用できる具体的なスキル（意見なし・助言なし、開かれた質問・閉ざされた質問、リフレーミ



ング、要約、感情の反射、反復、穏やかな直面化、沈黙等）を SA.-SDM のロールプレイ等を通じて学んだ。講師からは、「本人の話に巻き込まれすぎず、現在やこれからのこと、本人の希望や夢にフォーカスを当てた質問を行っていくことや「本人の話の真意を探っていくことが重要だ」とのアドバイスがあった。

左：講師よりレクチャーを受ける様子

右：ロールプレイを行っている様子

3 ワークショップ 2 日目概要

日時 2017 年 9 月 11 日（月）午前 9 時～午後 5 時 場所 龍谷大学梅田キャンパス

参加人数 19 名（講師除く）

2 日目は、1 日目で練習した質問スキルについて、障害当事者（ピア・コンサルタント）との間で実践を行うことに主眼が置かれた。この日は主に知的障害（軽度～中度）を有する 3 人のピア・コンサルタントの協力を得て、まずは講師がスキルを活用してインタビュー（目的のある会話）を行い、その後、参加者各人が健康、居住場所、ライフスタイル、金銭管理のうち 1 つの分野についてインタビューを行った。なお、インタビュー内容については、参加者に対して守秘義務を課し、かつ、ピア・コンサルタントが回答に躊躇しないよう同伴の支援者に外で待っていただくこととなった。約 1 時間にわたって行われたインタビューの後、講師より振り返りを行ったか、また、参加者によるインタビューの中で良かった点や学びがあった点などが共有された。





午後は、これまでのまとめも兼ねて、意思決定支援が「救済（rescue）」ではなく「支援（support）」であること、目的のある会話の重要性、expressed wish と best interest の違い、活用できるスキルの再確認等が行われた。

スキルの確認

最後に、今回の研修についての感想と今後どのように活かして行けそうかについて、全員からの見解を聞き、ワークショップは終了した。



全員で記念撮

影

3 - 3 家族向け SDM ワークショップ in 東京

1 実施日時及び場所

日時 平成 29 年 9 月 13 日（水） 午前 10 時～午後 3 時

場所 東洋大学 白山校舎

＜開催の趣旨＞ S D M - J a p a n では今年度の一連のワークショップの一つとして障がい当事者と日常的な関わりの最も強い家族に意思決定支援の目的を理解していただき、家族が日常の関わりの中で意思決定の方法を取り入れることを可能とするため、家族向けのワークショップを開催した。この家族のみを

対象としたワークショップという企画は、講師のシェア氏、デヴィー氏にとってもはじめての試みであるとのことであった。

2 当日の様子

（１） ワークショップに対する期待

参加者一人一人が自分の子どもの問題解決を中心とした期待を表明したが、講師からは「このワークショップは、お子さんの事を忘れてあなたが自分として感じるためのワークショップである」との趣旨が説明された。

（２） Best Interest（最善の利益） VS Expressed Wish（表出された希望）

意思決定支援の基本理念は障害者権利条約 12 条の法の下での平等であり、当事者の権利、意思、意向を尊重するための考え方と方法である。との説明を受けたのち、チームで事例検討を行い **Expressed Wish** に基づく「支援」と **Best Interest** に基づく「救済」の違いを確認した。

（３） 目的ある会話のデモンストレーション

講師二人による目的ある会話のデモンストレーションがあったのち、それぞれの参加者がチームを作り目的ある会話を行うためのそれぞれのスキルを練習した。

（４） 振り返り

参加者一人一人が「**Best Interest** だという意識もないまま、結果を押し付けていた」「子どもとの関係が変わりそうです」等という気づきを共有してワークショップを終了した。



※9月13日 意志決定支援 家族のための会話参加 講師：シェア氏、デヴィー氏と参加者

3-4 S D Mワークショップ

専門職向け集中スキル（東京 5 日間）

1 実施日時及び場所

日時 2017 年 9 月 16 日（土）～20 日（水）午前 10 時～午後 5 時・場所 筑波大学東京キャンパス

参加者 20 名

2 ワークショップ 1 日目概要

（１） ワークショップに対する期待

参加者それぞれがワークショップに対する期待を表明し、それを全体でシェアした上で参加者それぞれのワークショップにおける目標とした。その際、参加者のみならず、トレーナーからもワークショップに対する期待が語られ、全体として本ワークショップが目指すべき方向性について共有がなされた。

（２） Best Interest（最善の利益）vs Expressed Wish（表出された希望）

Expressed Wish（表出された希望）と Best Interest（最善の利益）の定義について参加者間で話し合わせ、そのことを踏まえてそれぞれの違いについてさらに話し合った。その上で、事例をもとに Expressed Wish（表出された希望）に基づく支援と Best Interest（最善の利益）に基づく救済の違いについてそれぞれ実例を挙げて話し合った。

（３） 意思決定支援モデルの理解

南オーストラリア州における意思決定支援モデルの理解を図るために、模擬的に意思決定者、サポーター、非公式ネットワーク、サービス提供事業者、コミュニティのつながりからなる意思決定支援実践におけるチーム形成を行い、それぞれの役割や特色について確認を行った。

（４） 日本における意思決定支援実践のフィードバック

日本において南オーストラリア州における意思決定支援モデルを実践した小杉氏と野口氏より、その際の体験に関して、ファシリテーターの役割、意思決定者の変化、うまくいったこと・いかなかったことについてお話をいただいた。

3 ワークショップ°2 日目概要

(1) 目的のある会話

意思決定支援において意思決定者の Expressed Wish（表出された希望）や Will and Preference（意思と選好）を引き出すためにファシリテーターに必須となる目的のある会話の4つの基本的スキルについて説明を受け、演習を行った。詳細は以下の通りである。

1) 意見なし・助言なし

質問に対して自由に答えることができる開かれた質問（open question）と、答えが「Yes・No」に限定される閉ざされた質問（closed question）とを用いて、模擬的に健康、居住の場、ライフスタイル、金銭管理についての会話を参加者とトレーナーが行った。その際、聞いている内容に対して意見や助言を与えず、また自己の経験を語らず傾聴のみ行うことを意識した。

2) 現在とこれからのことについて話す

これまでのことや関連するリスクについての話を避けるための会話を参加者とトレーナーが健康、居住の場、ライフスタイル、金銭管理について模擬的に行った。これまでのことや関連するリスクについての話が出たときには閉ざされた質問（closed question）でその会話の流れを切り、開かれた質問（open question）でこれからの夢や希望を語ってもらうようにした。その際、話の内容をまとめて伝える要約や話の内容を別の視点から言い換えるリフレーミングのスキルを使うことで、より意図的に会話を進めることができた。

3) 話の内容に巻き込まれない

話の内容に巻き込まれないように、「いつ」「どこで」「どうやって」「なぜ」という言葉を使わず、かつリスクに関連しない内容について話すことを意識しつつ、健康、居住の場、ライフスタイル、金銭管理に関する会話を参加者とトレーナーとの間で模擬的に行った。その際、限界や問題にこだわることにつながるので、細かいことにはこだわらずに、相手の夢や希望を引き出すことを意識した。

4) 相手のできることや夢を広げるチャンスを探す

未知のことについての認識を広げることを意識し、健康、居住の場、ライフスタイル、金銭管理に関する会話を参加者とトレーナーとの間で模擬的に行った。その際、会話から相手の意図していることを投げ返す感情の反射を行ったりして相手が語ったことに対してどう感じているのかを把握し、そこからそのことを本当に望んでいるのか、あるいは好きなのかを把握することを試みた。

4 ワークショップ°3 日目概要

(1) ピアコンサルタント

ピアコンサルタント（知的障害当事者）をお招きして前日に学んだ目的のある会話の4つの基本スキルを活用した模擬ミーティングが行われた。その際、トレーナーがピアコンサルタントに対してスキルを用いたインタビューを行い、あわせて参加者からインタビューに加わる者を募った。その際、インタビューに加わった参加者は健康、居住の場、ライフスタイル、金銭管理の中の1つについてピアコンサルタントにインタビューを行うこととされた。その際、トレーナーからはインタビューの「場」作りとピアコンサルタントの居心地の良さについての確認がなされた。また、実施されたインタビューを受けて、参加者からピアコンサルタントの健康、居住の場、ライフスタイル、金銭管理についての希望や願い、夢が何だったのか確認がなされた。終了後にはインタビューに加わった参加者の感想を全体でシェアし、ピアコンサルタントの健康、居住の場、ライフスタイル、金銭管理についてどのように読み解くかについて全体で話し合いが行われた。また、4つの基本的なスキルの使われ方について確認がなされた。その上で、普段の会話と目的のある会話の違いについて参加者同士で話し合いがなされた。

（１）目的のある会話

前日に学んだ目的のある会話の4つの基本的なスキルに加えて、エコー、感情の反射、開かれた質問と閉ざされた質問、言い換え、沈黙、穏やかな対立、意味探し、要約、フォーカシングについての説明を受け、演習を行った。詳細は以下の通りである。

１）エコー

相手の発言の一部について一言オウム返しで返すことで、その部分に相手を引き込むことができる。

例)「今日、車をぶつけて、ひどく壊してしまったんだ」、「ぶつけたんですね」もしくは「壊れたんですね」

２）感情の反射

相手の発言に際してその感情面に着目し、それがどのようなものを返すことで、発言を受け止めているということを知らせることができる。

例)「今日、兄の仕事仲間に兄のことで知っておいた方が良いと思うことを話したら、後で兄に怒鳴り散らされたんですよ」、「傷ついたのでですね」

３）開かれた質問と閉ざされた質問

開かれた質問では話が進展していき、閉ざされた質問では「はい、いいえ」の回答が相手から返ってきてそれ以上話が進まない。

例)「どうして卵が好きなのか話してもらえますか？」（開かれた質問）、「卵は好きですか？」（閉ざされた質問）

４）言い換え

語られた内容を別の視点から言い表すことで、相手に聞いていることや理解していることを示すことができる。

例)「今お金がありません。給料日まで1週間もあります。冷蔵庫の中の食べ物は少ないし、明日は友達と誕生日の夕食に行くことになっているので困っています」、「問題は明日ご友人のための夕食に行くお金がないということと、給料日がまだ先だということですね」

5) 沈黙

最も効果的なスキルの1つだが、このスキルを用いるのに慣れるまでは使用しない方が良い。

6) 穏やかな対立

話の中で長所と短所があることを話し手にわからせ、話し手に穏やかに矛盾した言動に向き合うようにすることができる。

例)「ジムに行くのが嫌なんです。でも、毎週友達と一緒にいくんです。友達のマークのことが本当に好きなんです。来週はいかないですよ。マークがそのことが嫌でも気にしません。単にいかないだけですから」、「ジムに行けば好きな友達に会えるけれども一方で事務が嫌いだということで心がかき乱されているようですね。それで間違いないですか？」

7) 意味探し

話の中で話し手の真意を確認するスキルであるが、通常は会話が十分に展開され、他のスキルが用いられた後に用いる。

例)「今日彼女と別れてあれこれ考えなければならぬことがたくさんあるんですよ。別の家を探さなければならぬですし、彼女の家から自分の荷物を運び出さなければならぬですし」、「とても大変ですね」

8) 要約

語られた内容を忘れないために話が進んでいく前に要約を繰り返す必要がある。そのことによって、話し手に聞き手が聞いてきた内容を理解していることを伝えることができる。また、話し手が話した内容を聞き手が要約して伝えることで、話し手が自分の話した内容を整理することができる。

9) フォーカシング

話された内容の要点に焦点を絞ることにより、時間を有効に使うことができる。

例)「猫がいなくなって、それと、今日友達がしたことが本当に嫌だし、明日母親と父親の誕生日プレゼントを買いに行かなければならぬですし、その時に新しい服を着たいですし、父親の誕生日にはパーティーをしたいですし」、「たくさんのことについて話してくれましたけど、どのことについてもっと話し合いたいですか？」

5 ワークショップ° 4 日目概要

(1) 態度と価値観

態度と価値観の違いについて、全員でいくつかの質問を通して確認を行い、それが障害のある人との間の場合とそれ以外の人との間の場合とで違いがあるか確認を行った。

(2) ピアコンサルタント

前日に学んだ目的のある会話のスキルを確認するために、ピアコンサルタント（知的障害当事者）をお招きして模擬ミーティングが行われた。その中で、トレーナーによって前日に学んだスキルによりピアコンサルタントの健康、居住の場、ライフスタイル、金銭管理についての希望の表出が試みられた。

(3) スキルの復習

上述のスキルについて、復習として参加者が2つのスキルを用いてトレーナーと模擬ミーティングを行い、その中でスキルの復習と理解の定着が図られた。

6 ワークショップ° 5 日目概要

(1) スキルの復習

2 日目及び 3 日目に学んだスキルについての復習を行うために参加者とトレーナーの間で模擬ミーティングが行われ、スキルの復習および獲得状況の確認が行われた。その際、トレーナーが障害のある人を演じ、参加者が目的のある会話をしながら模擬ミーティングが実施された。なお、参加者は模擬ミーティングが行われる前に使用するスキルを2つあらかじめ表明した。そして、残りの参加者がコーチ・メンターとなり、参加者のスキルの使用状況について評価を行った。

(2) 振り返り

1 日目のワークショップに対する期待で出された内容を振り返り、今後どのように意思決定支援実践を行っていくかについての決意表明を行った。

3 - 5 スーパービジョン /コーチング/メンタリング

1 開催概要

日時 9月22日（金）9:00～17:00

場所 東洋大学 白山校舎 10号館

参加者 15名

講師 シェア・ニコルソン、デビー・ノーレス

2 内容

（1）研修の様子

大阪ワークショップ、東京ワークショップの受講者から希望者を募り、「スーパービジョン/コーチング/メンタリング」についての追加研修を開催した。参加者は、今後、日本においてSDMプログラムを実践していく意思のある人たちに限定し、15名が集まった。以下のように、講義とグループワークを交えながら研修が行われた。

① スーパービジョン/コーチング/メンタリングの目的と機能

スーパービジョンの定義：プロセスを管理する。遂行の間の監督あるいは指導。

コーチングの定義：指導者の能力の歯にないで指示もしくは命令を行う。教育する。

メンタリングの定義：賢明なもしくは信頼できる助言、支持。影響力のある先輩からの支援。

② SDMプログラムにおけるリクルート面接の場面を想定して、「目的のある会話」の面談スキルの学習

4つの基本的なスキル

1. 助言、意見はしない
2. 相手の話に巻き込まれない
3. 現在と未来について話す
4. 障害のある人の経験を広げ、創造的に「大きく」考える

ストレングスをもとにした実践で行われるスキル

- ・傾聴
- ・最小限の促し
- ・エコー・反復
- ・感情の反射
- ・言い換え・リフレーミング
- ・フォーカシング
- ・開かれた質問と閉じられた質問
- ・沈黙

- ・意味探しー物語にとらわれるのではなく、物語の意味を見つける
- ・穏やかな対立（直面化）ー一方ではあなたは～と思っています。でもこんなことが起こっています。
- ・要約

③ スーパーバイザーのあるべき姿について、フリーに意見を出し合いながら検討した。

不十分なスーパーバイザー

- ・ケースマネジメントとの混同
- ・親しくなりすぎる、または放任的になりすぎる
- ・批判的、県主義的

スーパーバイザーに求められる資質

- ・受容的態度
- ・包容力
- ・知識・スキル
- ・適切な表現力

④ 主なスキルを使いながら、「目的のある対話」の模擬ミーティングをおこなった。

（２） 成果

参加者に、SDM プログラムを実践していく意思があるかどうか確認し、トレーニングファシリテーターとスーパービジョン/コーチング/メンタリングを行っていく人を具体的に選定した。

事業４：意思決定支援実践シンポジウム

１ 実施日時及び場所

日時 平成 29 年 7 月 15 日 午後 3 時 30 分～午後 6 時 30 分

場所 東京大学 本郷キャンパス工学部 2 号館 213 講堂

＜開催の趣旨＞SDM-Japan では、定期的にシンポジウムを主催し、広く ExpressedWish(表出された希望)に基づいた意思決定支援・支援付き意思決定の普及啓発を目的として開催している。シンポジウムの参加は法律職、研究者、障害福祉・高齢福祉関係者のみならず、行政関係者や成年後見の支援者等の参加を予定した。

2 当日の様子

（１）SDM-Japan が目指すもの-「最善の利益 Best Interest」から「表出された希望 Expressed Wish」へ

意志決定支援の基本理念は「障害者権利条約」12 条の法の下での平等であり、人生における選択と管理（Choice and Control）が保障されなければいけない。しかし、従来の意思決定支援は、本人の安心・安全という言葉を基に「最善の利益」が優先されていた部分が少なからずある。SDM-Japan では、意思決定支援を行う際に、本人の「表出された希望」として本当の意思や希望を表出できるよう、専門的なスキルにより支援し、意思決定する機会を得ていくことを目的としていることについて説明。

（２）シンポジウム『Expressed Wish（表出された希望）VS Best Interest（最善の利益）-日本における意思決定支援(SDM)の取り組みと可能性』

南オーストラリア州で実践されている SDM を、日弁連の視察報告として紹介した。さらに、南オーストラリアモデルの SDM を日本で実践した 3 事例を発表。Expressed Wish(表出された希望)による支援により、意思決定者の変化や更には支援者の変化についても現れ、意思決定者の本当の希望が出されていく過程を事例により理解されたのではないかと。

（３）SDM-Japan の今後-南豪州 SDM トレーナー来日集中研修について-

9 月に行われる、SDM トレーナーによる集中研修について紹介がある。ワークショップは様々な対象に準備がされており、家族対象、専門職対象、スキル強化などを予定している。



※意思決定支援実践シンポジウムの様子

S D Mワークショップ（2017 年 9 月）

アンケート結果概要

2017 年 9 月に開催した 3 回のワークショップ（専門職向け SDM ワークショップ in 大阪、専門職向け SDM ワークショップ in 東京、家族向けワークショップ）の参加者にアンケートを実施した（結果の詳細については別紙を参照いただきたい）。全体的に、各ワークショップの内容や日程、費用といった点は概ね満足していただけたようであり、特に専門職は SA-SDM の理念や目的のある会話のスキルおよびチーム形成のプロセスについて実践的に学べたこと、家族は Expressed Wish という視点を知ることができたことについて満足度が高かったようである。本ワークショップでの学びを今後どう活用するかという設問では、専門職・家族ともに「目的のある会話のスキル」を活用していきたいという意見が多かったが、スキルの習得が不十分という

不安や、現行の制度・自らの職務の中でフルモデルを実行することのむずかしさについての感想が複数寄せられた。「成年後見の枠組みの中でフルモデルを実践するのは難しいと感じた」「活用するには職場やボランティアらの理解が必要」という意見がある一方、「職務上 6 ヶ月のフルモデルを行うことは難しいが、業務中においてスキルを活用しながら本人の意思の表出を促すお手伝いが出来るのではないか」「考え方を自分の実践に取り入れていきたい」「仕事では難しいかもしれないが、障害あるなしに関係なく身近な友人、家族含め意思決定を大事にしていけたらと感じる」「できる範囲で我が子にも応用していきたい」といった感想もあり、継続的な研修やフォローアップ・フィードバックの場を望む声も多かった。また、今後学びたいこととして、言語理解が困難な障がい者への活用や、チーム構成時のマネジメントスキル等が挙げられていた。

また、今年度初めて開催した家族向けワークショップの参加者を対象としたアンケートでは、これまで親という立場からどうしても本人に善かれとの思いが強くなりがちで Best Interest に偏っていたという感想が複数あり、「本人の意思決定を家族が誘導しすぎているのではないか。より一層寄り添い傾聴することが大事ではないか」「私の意見に従わせていたことに気がつき、本人の意思を引き出す努力をしてこなかったと反省した」等、これまで家族のかかわりを振り返る機会になったのではないかとと思われる。さらに、「本人の様々な経験が不足していることにより、意思・好きなことが狭まれているように感ずる。家族は臆することなく、本人の興味あることを見たり経験することにより、生活の幅が広がり、将来に対する展望が見え、夢へとつながるのではないか。それが現実化していくことを叶えてあげたい」といった記述もみられており、障がい当事者との日常的な関わりが最も多い家族に意思決定支援の目的を理解していただく一助になったのではないかと考えられる。

いただいたご意見を今後のワークショップ運営やその他 SDM-Japan の活動に活かしていきたい。アンケートにご協力いただいた皆様に感謝申し上げます。

<全ワークショップ共通アンケートの結果概要>

1. このワークショップをどのようにして知ったかということについて、専門職は、「7 月のシンポジウムに参加し 9 月のワークショップについて周知されていたのでそこで知った」「職場や知人からの紹介」「学会や大学院のメーリングリストで案内された」といった経路が多かった。家族向けワークショップでは、親の会での案内や友人・知人からの紹介が多かった。専門職・家族ともに、SDM-Japan の Facebook ページで知ったという参加者が複数あった。

2. このワークショップに参加した動機について、専門職は、SA-SDM について知りたい、学びたいといった内容が最も多く、「SA-SDM の本質を知りたいと思った」「SDM の、インフォーマルな人々も参加できる支援の方法が学びたいと思ったから」等の記述がみられた。次いで、意思決定支援を学ぶため・スキルを習得するため、現在の仕事（ソーシャルワーク、後見等）で意思決定支援をしたいため、という目的での参加が多く、「利用者本人の意思・自己決定と言いつつも、Best Interest を優先していることに矛盾を感じたから」という記述もみられた。家族の参加動機としては、意思決定支援を学ぶため、子どもの意思決定支援に活かすため、というものが多く、「意思決定支援に関心がありながら、本件について学べる場が今までなか

った」「子どもの意思について考えるようになってきた」「息子の意思決定に常々悩んでいた」等の記述があった。

3. 内容は有意義だったかについて、参加者の約 2/3 が「そう思う」、残りが「概ねそう思う」と回答していた。専門職からは「表出された意思（希望）の考え方の基本が理解できた」「実際にどのように行っていくのかを実践モデルの演習形式で示していただけたのが分かりやすかった」「当事者支援を通じて地域を巻き込む方法は大変興味深かった」、家族からは「まったく考えてもいない視点からのお話だった」「エクスプレッションを引き出すスキルを少し学べたことと、自分の意見を押しつけていたことに気がつくことができた」などの感想があった。

4. 資料等は分かりやすかったかについて、参加者のほとんどが「そう思う」「概ねそう思う」と回答していた。「簡潔で良い」「一日ごとに分けられていてよかった」という一方で、「原文もいただきたかった」「参加者のスキル・目的・進捗等によってワークショップでの説明が省かれた箇所があった。後で見返すとコメントを頂きたいと思ったところが数か所あった」「翻訳ではなく、オーストラリア式の表記・表現がつかみにくいことがあった」という意見も寄せられた。

5. ワークショップの日程、場所、費用等について、専門職は休日がよい、家族は平日が良い、という意見が多かった。特に東京集中ワークショップは 5 日間であったため、「5 日間平日だと厳しい」「今回、連休が入ったので参加しやすかった」との記述が複数みられた。家族は「作業所に行っている間をお願いしたいので平日が良い」「休日は障がいの息子がいるので外出できない」「子ども参加でもよければ休日でもよい」等の意見があり、今後参考にしたい。

ワークショップの一日の長さは、ほとんどの参加者が「ちょうどよい」としていたが、「長すぎる」と答えた参加者も複数あり、特に東京集中ワークショップは「会場が遠いと通うのが大変」「10 時開始だとありがたい」という記述もあった。「通訳が入るので長くても致し方ない」という意見もあった。

ワークショップの日数は、2/3 以上が「ちょうどよい」と答えたが、大阪（2 日間）と家族向け（1 日間）の参加者は「短すぎる」、東京集中（5 日間）の参加者は「長すぎる」と答えた人が複数名いた。

場所や参加人数についてはほとんどが「ちょうどよい」と回答しており、「ぎりぎり通える距離」「都内だったので行きやすかった」「寒さについての事前アナウンスが欲しかった」「ずっと近い距離で意見を聞いていただけた」などの意見があった。費用についても、ほとんどの参加者が「妥当」と回答していた。

6. 今後 SDM モデルを日本で実践しようと思うかについて、専門職は約半数が「そう思う」と答え、「今の障がい者支援方法においてとても有効だと思う」「徹底的な本人中心は、今、日本のどこにもないと感じているため。周囲を変容させるパワーを感じたから」などの記述がある一方で、「ただし、日本の制度、現場実践対応可能な形に若干アレンジが必要」「やってみたいと思うが、どういうところから、どの部分から取り入れるか整理して取り組みたい」「職務上 6 ヶ月のフルモデルを行うことは難しいが、業務の中においてスキルを活用しながら本人の意思の表出を促すお手伝い出来るのではないか」という意見もあった。「思わ

ない」と答えた専門職は、「成年後見の枠組みの中でフルモデルを実践するのは難しいと感じたため」「そのままの形を実践するにはかなり壁が高いので、考え方を自分の実践に取り入れていきたい」等の感想を述べていた。家族向けワークショップの参加者は、ほとんどが「そう思う」と答え、「日本の意思決定支援は周囲が必要なことをするときしかやっていない」「意思決定支援を大事にしない支援の現場が多すぎる」「実践したいが、もう少しスキルが必要」「継続的に活動や研修の場が欲しい」といった意見があった。

7. 今後の実践や自身の活動で活用できる／活用が難しいと感じた点とその理由について、専門職・家族ともに「目的のある会話のスキル」を活用したいという意見が多かった。本人との面談や本人参加のミーティング等で本人の思いを引き出したい、それにより本人の希望を聞くことが大切であるという共通理解につながるのではないか、という意見もあった。活用が難しい点として、専門職は主に「現場での活かし方（リクルート、チーム形成、制度・体制づくり）」「スキルが未熟」「言語理解が困難な重度障がい者に対する活用」を挙げており、家族は「支援者の理解が必要」「臨機応変にスキルを活用するまでに至る技術の習得が大変そう」「大きな夢や希望に向けた支援（親の時間にも限りがあるため）」等を挙げていた。

8. 今後、参加者のフォローアップ／フィードバックの会合を開く場合、参加を希望するかについて、専門職はほとんどが「希望する」と回答していた。理由として、「もっとスキルを身につけたい」「今回のワークショップで習った様々なスキルは、日々トレーニングをつまないと身につかないと思うので、そうした機会があればぜひ参加したい」「自分はSDMは行えないと感じているが、実践している人の活動は聞いて役立てていきたい」といった記述がみられた。家族は約半数が「希望する」と答えており「もう少し知りたいです」「参加可能な条件が備えば」等の感想があったが、半数は無回答であった。

9. SDM-Japan のメーリングリストへの参加希望について、専門職のほとんど、および家族の約半数が「希望する」としていた。

10. SDM-Japan、講師へのメッセージとして、専門職からは、「日々の支援でも活かせるスキル・支援概念を学ぶことができ、感謝している」「ワークショップで教えていただいたことを活かし、これまでより被後見人等の方の意思を汲めるよう頑張りたい」という声や、今後の継続的なワークショップの開催を望む意見などが寄せられた。家族向けワークショップ参加者からは、「できる範囲で我が子にも応用していきたい。子どもを保護することばかり親は考えてしまうが、それが子どもの希望を妨げていく場合も多々あるのだと分かった」「ワークショップを通して、意思決定支援の対話とはどういうものなのか、なんとなく理解できた」「難しいが、エクスプレス・ウィッシュを引き出すために、今日教えていただいたことを日々心に置いて、対話していくことを心がけていきたい」「このモデルを日常的に継続して行っていくことで、本人の中に本人の望む意思や選好が育まれて来ると考えてよろしいのでしょうか。貴重な体験をさせていただきました。」等の感想があった。

<家族ワークショップ参加者へのアンケートの結果概要>

1、地域で参加している当事者活動について、参加者（家族）の多くが、親の会やNPO法人での市民後見活動、市民への啓発活動、行政や事業所への働きかけなどを行っていた。

2、障害のあるご家族（ご本人）の年代は、20代～30代が半数以上を占め、次いで40～50代が多かった。

3、本ワークショップの感想として、ほとんどが「役に立った」「やや役に立った」と回答しており、その理由として「私の意見に従わせていたことに気がつき、本人の意思を引き出す努力をしてこなかったと反省した」「支援と救済の違いを知ったこと。（これまでは）ほとんど救済だった」「Expressed Wishを知ることができたこと」「傾聴など今まで知っている方法とまた違っていた」等が挙げられた。「あまり役に立たなかった」と回答した1名は「本人は大変障がいが高く、言語理解も難しい状態なので、今回のワークショップの内容にはあまり当てはまらなかった」と記述していた。

4、南オーストラリアの意思決定支援実践モデルへの関心について、①南オーストラリアの意思決定支援モデルをもっと詳しく知りたいですか？という問いに全員が「とてもそう思う」または「そう思う」と答えていた。その理由としては「実践したいから」「まだ対話のスキルしか学んでいないから」「今回はSDMの表面のみだったので」「具体的にどのような場面でどのように支援するか学びたい」「予備知識がなく初めて飛び込んだ感じなので」「自分の価値観を優先し、当事者にとってもそれが良いと思ってしまうので、即否定となったり、本人の思いを汲まずに押し付けてしまう」などが挙げられていた。また、②このモデルへのご本人の参加を希望されますか？という問いについては、17名中4名が「希望する」、4名が「やや希望する」と回答し、「本人にも希望を語ってもよいということを伝えたい」「どんな反応をするのか遠くで見てみたい」「本人をよく知り、信頼できる支援者が可能であれば希望するが、現時点では難しいと感じる」などの記述があった。「希望しない」と答えた4名は、障がいにより言語理解が難しいことを理由に挙げていた。

5、エクスプレッドウィッシュ／意思と好み／最善の利益についてどのように感じられたかについて、「新しい視点、切り口に気づかせていただいた」「日常生活の中で意識せずに、混濁して使っていた」「エクスプレッドウィッシュ…その人の夢、希望を表出させることの難しさをとっても感じた。特に経験が少ない本人は選択肢が広がらないのではないかと思った。最善の利益と思って第三者や親が本人の同意なく決めたり誘導してはいけないと、心にとめて関わっていきたい」となどの意見が寄せられた。

Yahoo! Japan 取材について

東京集中ワークショップにおける取材

2017年9月16日から20日にかけて行われた集中ワークショップにおけるについて、Yahoo!ニュース特集に取り上げられた。動画は約7分（<https://news.yahoo.co.jp/feature/795>）に及んでいるため、以下では、同特集の記事の一部を抜粋する。

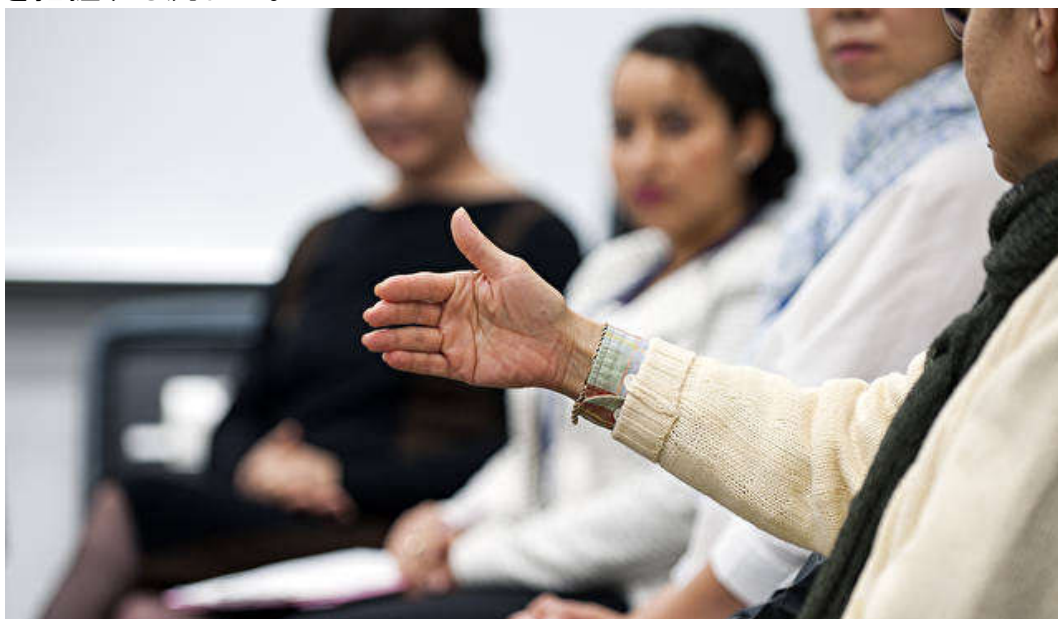
「本当は何を望んでいるの？」—認知症高齢者 その意思はどこに

2017/10/26(木) 10:01 配信

SDM という新しい試み

認知症患者や知的障がい者らについてはこれまで、「自己決定の能力がない」という受け止め方が多かった。「でもそれは違う。そうした人たちにも自分のことを自分で決める能力がある」と考え、活動する人たちもいる。

その一つがオーストラリアで実践されている SDM という活動だ。「Supported Decision-Making」の略語で、日本では「意思決定支援」などと呼ばれている。家族や友人、地域の人々を加えた数名で「支援チーム」をつくり、本人を交えて月に数回、定期的にミーティングを重ねる。そうした対話を半年間継続し、本人の意思や希望を把握する流れだ。



東京で開かれた SDM のワークショップ（撮影：横関一浩）

実はこの9月、SDMに関するワークショップが東京で開かれた。SDMの第一人者でオーストラリア在住のシェア・ニコルソンさんも参加。知的障がい者や支援のボランティアらも参加し、実際にSDMの実践も試みた。

いったい、どんなコミュニケーションを繰り広げたのか。その様子を動画で見てほしい。「銀河の里」の様子も盛り込んだ8分超。「人の本当の意思とは」を考えさせられる内容になっている。

6.1 「どんな人にも意思表示の力ある」

ニコルソンさんはこう言う。

「どんな人でも意思を表明する力を持っています。言葉をうまく話せない人にも意思はあるのです。でも、その夢や希望をくみ取ることができるかどうかは、聞き手の力量にかかっています」

聞き手の力こそが必要——。その言葉に従い、会場では以下のようなやりとりが続いた。質問と対話を繰り返し、時間をかけて少しずつ心理的な壁を崩していく。それが SDM の特徴だ。答えているのは知的障がいのある男性だ。



シェア・ニコルソンさん（撮影：横関一浩）

——もしお金がいくらでもあったら何をしたいですか？

「野球に行きたい」

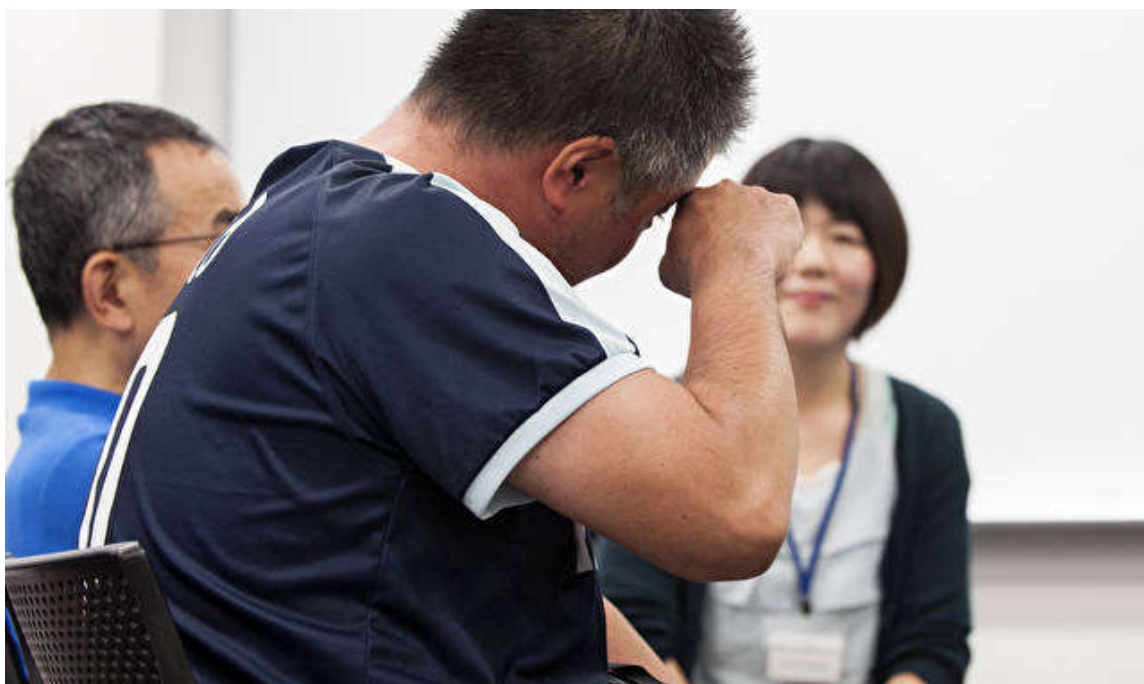
男性は、好きなプロ野球チームの応援で名古屋や東京に行ったことがある。

——大きく考えてみて！

「もっと大きく考えるのね？...だったら大リーグに行きたいです」

実践の中で、ニコルソンさんは「Think big! (もっと大きく考えて)」という問いかけを繰り返した。なぜだろうか。

「大きく考えてほしいのです。お金や体の障がいのことで、不可能だと諦めてしまっていることをです。想像力を豊かにして考えなければ、自身が経験してきた限られた世界から抜け出せないのです」



「大きく考えてみて」という問いかけも交えながら、対話の中に心の奥底を探る（撮影：横関一浩）